生徒指導部通心（信）第 26 号（令和５年・３学期スタート号）（2023．１．10）

「不易」と「流行」 誠実・克己・忠恕

～『○える』という言葉は、もはや辞書の中にしか存在しない？～

『萌えいづる春も冬あらばこそ』という言葉があります。冬はずっと続かない。雪が降っても、氷は必ず解ける。息吹があって、花は必ず春に育つんだ。という意味です。

「耐える」という言葉は、もはや辞書の中にしか存在しないものになりつつある。と私は思っています。

逆境（困難や問題）と順境（順調）は、人生において、より合わせた縄のように交互にやってくるものです。

順境の時には逆境の芽が潜んでいる。一方、厳しい冬の寒さの後には、やがて暖かい春がやってきます。

逆境は誰にでもどこにでも例外なく訪れます。

地震・津波・台風などの自然災害は別として、人と人との関わり合いから生じる逆境に際し、今日の日本人の多くは「耐える」ということを忘れていないでしょうか？

歴史を繙（ひもと）いてみても、「耐える」ということはかつて日本人の美徳でした。

それが飽食に慣れ、豊かな生活に包まれた今日、いつの間にかすべてにわたって・・・「耐える」ことより・・・「社会が悪い」・・・・「国が悪い」・・・・「環境が悪い」・・・・・・・・・・などと**自己責任を考える前に**・・・・・・・

「他責」に逃げ込んでしまってはいないでしょうか。自分も責任の一端を担う一人であり、社会の構成員であり、国民であることを忘れてしまっていると言えます。

私の書斎の壁には、横田南嶺師が揮毫（きごう）された・・・・・・・・・「法遠不去」に次の解釈が書き添えられています。

「世の中を生きてゆくには、道理にかなうことばかりではない。『なぜ、こんな目に遭うのか』と悲憤慷慨（ひふんこうがい）することもある。
しかし、人間の真価が問われるのは、むしろそんな時であろう。
去る時の弁解（逃げるときの言い訳）はいくらでもできる。
しかし、一言も発せずして黙して忍ぶことの貴さを知らねばならない。
法遠という僧は、あらゆる苦に耐え、師のもとを去らなかった」

私たちは、すべてに恵まれた今の時代に感謝するとともに「法遠去らず」・・「あきらめない」、「やめない」、「ここを去らない」という法遠禅師の志をわすれてはなりません。

『致知』６月号「巻頭のことば」より　アサヒビール社友　福地　茂雄

「○○で時間がないから・・・」「できる環境が整っていないから・・・」「○○で忙しいから」と自己責任を考える前に、「他責」に逃げ込んではいませんか。**「できない理由は常に100あり！」**です。できない理由ばかり探さないで、一歩でも、１ｃｍでも、なりたい自分に近づくために、今自分ができることを探し、積み重ねましょう！さぁ令和５年が・・・３学期がスタートします！

県高生の・・・心の辞書には・・・「耐える」という言葉を・・・・・・・・残しておきませんか？